

こころの耳

伝えたい。だからあきらめない。

早瀬久美



講談社オンデマンドブックス

目次

第1章 法律の壁

法律の壁

講義が聞きたい！

第2章 聞こえない世界に生まれて

聞こえない世界に生まれて

ろう学校のガキ大将

負けず嫌いで頑固で

手話はダメ

初めての告白

第3章 ダンナとの出会い

ダンナとの出会い

全国ろう学生の集い

岡田重人くんの夢

第4章 薬剤師への道

薬剤師への道

山との出会い

いざ就職

薬剤師国家試験

スマイルフリースクール

第5章 △合格後の壁

国家試験合格を知って

宙ぶらりの1年半

ロンボク島での出会い

薬剤師免許却下

大きなうねり

第6章 薬剤師法の改正

改正にむけて

人前式

薬剤師になる

夢にむかって

あとがき わたしのこれからの道

こころの耳——伝えたい。だからあきらめない。

第1章 法律の壁



2001年7月17日の薬剤師免許交付のとき、報道陣に囲まれて。

法律の壁

いつもなら我慢できるのにそのときはどうしても我慢できなかった。

体の底から感情がこみ上げてきた。1999年8月薬剤師の免許申請を却下されたときのことだった。

わたしは、生まれつき耳が聞こえない。ずっと音のない世界で生きてきた。

「聞こえないってつらいだろうね」とよく言われる。しかし、わたし自身聞こえなくてつらいと感じたことはあまりない。

つらいだろうと思う理由を聞くと、

「電車に乗ったときの車内放送が聞こえない」

「車のクラクションが聞こえない」

「音楽を聴くことができない」

と答える人が多い。

音のある世界にいる人にとって音がないということは、想像できないくらい大変だと思うだろう。

ところが、もともと音のない世界にいる人間にとっては、音がなくて当たり前なのだ。

音というものの存在がイメージできない。車内放送の音もクラクションの音もわたしはその存在を知らなかった。

いま、もし聞こえる人が突然聞こえなくなったとしよう。

失われた音の存在のあまりの大きさにとつてもなく苦しむだろう。

その苦しみや大変さは、生まれつき聞こえないわたしには、想像もできない。

「じゃあ電車に乗って次の駅はどうやってわかるの？」と聞かれる。

普段は特に意識していない。わたしはどうやっていいるのかな？ と考えると、乗る前に駅名と駅の数調べて覚えてから電車に乗っている。そして駅に着くたびにホームの駅名を見る。これは小さいころからごく自然にやってきたことだ。そもそも世界でいちばん車内放送が多いのは日本らしい。次の駅名を放送しない国のほうが一般的だ。そのような国の人がとっている行動は、きつとわたしと同じだろう。そして普段意識していないに違いない。

車のクラクションについても、道を歩いているときはいつもうしろに注意している。歩道を渡るときは必ず右左を見ている。すべて小さいころからの習慣だ。耳に頼って、目で確認をしない人よりもよほど安全だ。

もちろん車内放送を字幕で表示したりチャイムの音を振動で知らせる機器などの存在は、ろう者にとっては必要である。やはり音のある世界でろう者が生きていくには何かと不便なことが多

いい。もっと便利になってほしいと思うことはたくさんあるが、だからといってそれをつらいと思ったり不幸だと感じたことはない。

ただ、今まで変だなと感じてきたのは、聞こえないということや物理的なバリアではなく聞こえる人たちが持っている心のバリアの存在だった。

あるジムでは、聞こえないことを理由に入会を断られた。

旅行会社に行くところう者だけの旅行はダメと言われた。

結婚式を挙げようとホテルに行ったらろう者が来るとホテルの格が下がると言われた。

むかしは、家を買うことも結婚することも赤ちゃんを産むこともなかなかできなかった。

車の免許もむかしは取れなかった。

すべて「聞こえない」という理由だけで。

そんなことは日常茶飯事だった。

どんなにイヤな思いをしてもぐっとこらえた。ジムでもホテルでもきちんと説明してきた。

「聞こえない」ということは理由にならない、と。

きちんと説明すればきつとわかってもらえると思っていた。実際にいままでわかってもらえたことも多かった。

しかし自分の夢だった「薬剤師」の道を、「聞こえない」という理由で却下されたときは、言葉にできない感情が一気に吹き出た。ぐっとこらえたかった。きちんと説明しさえすればわかって

もらえるはず。だが相手は人間ではない。法律という途方もなく大きい壁だった。

自分が何かをやりたいと思ったとき、きつといろいろな壁にぶつかる。壁にぶつかったときに人は、どのような行動に出るのだろうか？ しぼし立ち止まって壁の大きさや厚さを考えたり、どうやって壁を乗り越えるか思索する人もいるだろう。あるいは、壁の大きさに逃げ出したり壁の抜け穴を探したりする人もいるかもしれない。もしあきらめようとしたら「あきらめないでがんばればきつと夢が叶う」とだれかにアドバイスされるにちがいない。しかし自分がやりたいと思った仕事が、法律によって「ダメ」と言われたとき、いったいどうすればいいのだろうか？

わたしはかなりの負けん気の持ち主だ。たいていのことならへこたれない。どんな壁だってなんとかしてみせると思う。だけど法律でダメと言われたらどうしていいのかわからない。法律を変えてみせる！ なんて思いもしなかった。

わたしが薬剤師になりたいと思ったのは、中学生のときだった。いまでもはっきり覚えている。それは母との会話だった。中学生になったころからさかんに母と将来について語り合うようになった。ある日の晩、食事をしながらのことだ。

「仕事をするなら何がいいかな？」母特製のとんかつをほおばりながら聞いた。

「やはり久美がいちばんやりたいことがいいと思うよ」

いつも母は、わたしの気持ちや考えを優先してくれる。